

常不輕菩薩の生き方に切り替えよう

【7月8月度の御金言】釈尊塵点劫の間修行して仏にならんとはげみしは何事ぞ。孝養の事なり。・・・今法華経と申すは、一切衆生を仏になす秘術まします御経なり。
『法蓮抄』（1046頁）

法華講信条

- 1, 謗法厳戒の信仰を貫こう。(信心)
- 1, 行学絶へなば仏法はあるべからず。(行学)
- 1, ただ一言でも妙法を伝える勇気を持とう。(破邪顕正)
- 1, どんなことがあっても憶持不忘の信心を貫こう。
- 1, 現世利益絶対否定の信心をしよう。(示教利喜)
- 1, 成仏大願、菩提心堅固の精進をしよう。
- 1, 御題目を唱える為にこそ生まれてきた自覚を持とう。
- 1, 噂に流されない、人に媚びへつらわない自立した信心をしよう。
- 1, 妙法聞法の縁を大切に求道の信心をしよう。

1991年2月13日掲載

☆ただ一言でも妙法を伝える勇気を持とう。(破邪顕正)

世間の常識では、仏壇は本家にあつて、分かれ家の子供の所帯には仏壇はいらない。分かれ家で誰かが亡くなったら、その人の供養の為、仏壇を買って来て成仏を願う。そういう事が無ければ、本家の親が亡くなったら、跡継ぎが仏壇を引き継ぐまで、家に仏壇が無くてもかまわない。そういう間違つた常識が出来上がってしまっています。

信心は家の信心ではありません。一人一人の人間が生き方として信心するのであります。本家の畳や柱や瓦が信心しているわけではありません。ですから、その家からお葬式を出したことが有ろうが無かろうが、毎日の生活の中で、生きる法と向き合つて信心修行を中心に生きなければいけないのが信心でありますから、子供が五人いれば、独身、所帯持ち関係無く、五人の住まいに御本尊を御安置して、一人一人生活の中心にしていくように、生きていく内に導くのが法燈相統であります。死んでから、その事を教える事は出来ません。死んだ時のお葬式と後々の法事をしてくれる事が法燈相統ではなく、日蓮大聖人の法を生きる柱として信心修行する事が法燈相統であります。

私も子供が他県の大学へ行くようになって一人暮らしをするようになった時、本人と話し合い、説明をして、一人暮らしするという事は、信心も一人立ちするという事だから、法華経の行者として、信仰中心の生活をして下さいと伝えました。仏壇仏具を求め、アパートへ御本尊送りに参りました。その折に、毎日の朝夕の勤行、朝一番のお水をお供えする事、ご飯を炊いた時に、炊きあがりの御飯をお供えする事、シキミの水を毎日変える事、季節の果物御菓子をお供えする事、仏壇の掃除等を教えて来ました。妹は、大学の学生寮に入り、同部屋の人がある事から、御本尊様を御安置する事が出来ないの、御本尊を御巻きしたまま持参し、手を合わせる事が出来る時、勤行が出来るときには勤行唱題する様に話しました。就職して、家を出て一人暮らしする様になって、兄と同じ様に、御本尊送りをし、どんなに忙しくても勤行唱題を忘れないように言い聞かせています。

法燈相続は、生きていく内に何度も話し合い、説明し、根気よく伝えていかなければなりません。あきらめていては何も伝わりません。他人のせいにする事は出来ません。子供が産まれた時から、初参り（御受戒）七五三、正月参り、お盆、春秋彼岸、墓参り、御会式等々に子供を連れて参詣し、信心の縁に触れさせる中で、日蓮大聖人の法がどのようなものなのか、何故御父さんお母さんが信心しているのかを何度も何度も伝えて、初めて伝えるものなのであります。子供にも人格と、信仰の自由があるからという人がいますが、世の中にある沢山の宗教から、たまたま日蓮大聖人の法を信仰しているだけではなく、日蓮大聖人の法でなければならぬという共感と信念が無ければ、手を合わせて、先祖の成仏を願うことは出来ません。産まれた時から、日蓮大聖人の法を子供に伝え、思春期になって、子供が日蓮大聖人の法から離れて行くならば仕方ありませんが、子供の時から親は手を合わせても子供には合わせる事、説明もせず、自由にさせておくというのでは、信仰の自由と意味が違うのではないかと思います。例えば、女の子は、どうせ嫁いだ先の信仰に従わなければならないのだから、信仰にこだわりがあると自由に恋愛、結婚出来ないから、子供に信仰の話はしないという人がいますが、それでは本当に子供の生命、人生を大切に思っている事にはならないのではないかと思います。法燈相続は、先ず親がどれだけ深い信念で子を思い、信心を思っているのかが全ての源だと思います。いずれにしても、日蓮大聖人の法を信仰するという事は、毎日一日二回、朝と晩に約一時間の勤行をするという事が基本ですので、生半可な気持では信仰を親から子へバトンタッチしていくという事は難しいのであります。信心を生活の支柱にして生きるという事は、自分を中心にして、おもしろおかしく生きたいという人間にとって、真剣に生命と正面から向き合うよほどの覚悟と根性がないと出来ない信心なのであります。